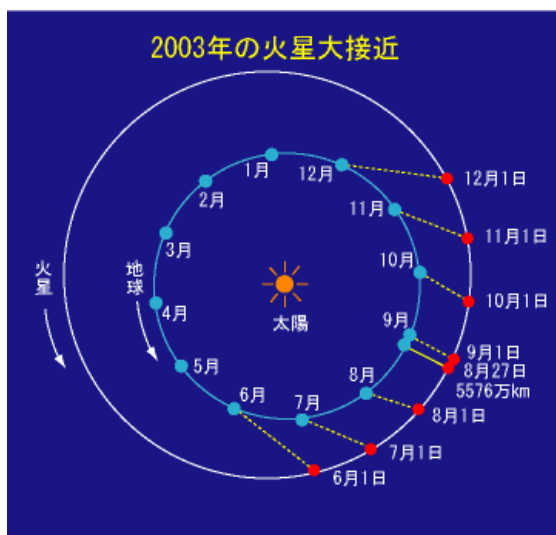


天文ニュース No.183

2003年6月22日発行

火星の大接近



8月27日に火星が地球に大接近します。前後の期間は火星を見る絶好の機会です。

火星は、地球軌道のすぐ外側を約1年11か月かけて太陽を公転しています。そのためスピードの速い地球が太陽と火星の間に入り込み、太陽・地球・火星と並びます。このとき、地球と火星の距離が最も近くなります。このような接近は、2年2か月ごとにおこりますが、火星の軌道は円より少しずれた楕円形をしていて、地球と火星の軌道の間隔は、最も近いところで5500万km、最も遠いところで1億200万kmと違いがあります。今回の接近距離は、5576万kmで、見かけの

直径も25.1秒角と大きく、望遠鏡で見ると表面の様子がよく見えます。このような大接近は、約6万年前の5572万km以来になります。

火星は、赤い惑星として昔から注目されてきました。古代ギリシャ人は火星の色を血の色と見て、戦争の神マルスにみたてています。火星の赤い色は、火星表面の鉄分を多く含んだ岩石の色です。最近では探査機により表面の詳細いようすがわかっています。

また、望遠鏡を使うと、表面のおおまかな模様をみることができます。極地方には氷(ドライアイス)が広がっています。火星の世界には、地球と同じように季節の変化があります。大接近の頃は、火星の南半球が見やすいときで、南極地方の極冠が少しずつ小さくなっていくようすが観察できます。

天文科学館でも火星の観望会を実施しますので、この機会にぜひごらんください。

図 2003年8月27日23時の南天
火星の明るさは - 3等

